

皆さん、こんにちは。今日は 2021 年 2 月 18 日 木曜日 夜の 7 時 17 分くらいです。
今日はめっちゃ寒いんです。私としては、皆さんと同じ会場で有意義な時間を過ごすことを望んでいますが、あまりにも寒いと、リモートや YouTube も時にはいいかな、という感じがしますね。
今日もまだ、会場には人っ子 4 人しかいないんです。でも、3 月には、皆さんと素晴らしい時間を共有できるんじゃないかと楽しみにしていますので、また足を運んでいただきたいと思います。

ところで、私は子供の時、めちゃくちゃテレビが好きやったんですね。テレビっ子。
大人の番組でもニュース番組でも、とにかく画面を見るのが好きだったんです。
そんな私が「どうしてもこれは見れない」という番組がありました。『ウルトラ Q』
怪奇現象などを扱うドラマ仕立てのモノだったけど、怖い！めちゃ怖い！
だから、チャンネル切り替える時、昔はプッシュじゃなくて回転式なので、ウルトラ Q を遮らないように遠回しをする感じで。ウルトラ Q を避けてたんですね。

ウルトラ Q にはモデルがあります。アメリカの『トワイライトゾーン』という 怪奇現象を扱う番組が日本に上陸したんです。白黒で『ミステリーゾーン』という番組ですよ。いくつか覚えてるんです。
「タタタタン・タタタタン・タタタタン♪」って、こんな音しません？とにかくもうね、めちゃ怖い。
「(低音で) 不思議な世界が 不思議でなくなる世界になります」とか言うて。「ミステリーゾーン」で。
家の中の壁のシミが人間の顔になってきたり、とにかく気色悪い。
その中に、こんな話があるそうです。

あるアメリカ人がヨーロッパを徒歩横断、ヨーロッパ大陸を乗り物に乗らずに歩き続けるという旅行に出ました。中央ヨーロッパに差ししかかった時、すごく天候が荒れて、大雨で前が見えないくらい。雨宿りしようにも どこにも何も無い。山の中。ふと見上げると、古いお城が見えたんですね。
「あそこで一晩泊めてもらおう。」扉を叩いていると、修道士/カトリックのお坊さんのジェロームが出て来ました。「今晚一晩 泊めてください」と言うけれど、中々ウンと言わない。
「困ってるんですよ。」ようやく入れてくれたけど、深夜になったら、下から何か呻き声が聞こえる。

地下室に下りて行くと、1 人の善良そうな男性が牢に閉じ込められているんです。
牢屋の出入り口に扉があって、そこに木の棒がグッと横に差し込められている。
「どなたか知りませんが、助けてください。私はジェロームに誘拐されて、閉じ込められてるんです。彼は気が狂っています。どうか、私を助けてください。」
非常に柔和な善良そうな人が、悲しげな声で「助けてください」と、土下座するように 拝み倒すように懇願するんです。彼は正義感が強い。「ちょっと待ってなさい。」

ジェロームの所に行って、「あの地下室はどうなってるんだ？あなたはいったい何をしてるんだ？」と詰問しました。するとジェロームは、「あれは全ての嘘つきの父サタン/悪魔と言われている奴で、封じ込めておくために、真理の木の棒で通せんぼをしているんだ。真理の木の棒が封印となって、奴はそこから出ることが出来ないんだ。」

この説明を聞いた時、「こいつ、ホンマに気が狂ってる」と思ってしまうんです。「悪魔？アホか！」そして彼は地下室に行って、なんと木の棒をバツと引っこ抜いて、善良な男に「さ、お逃げなさい！」檻から出した瞬間、グロテスクな姿にブワッと変わって、煙のようにパッと消えた。悪魔でした。しまった！やらかした！！

ジェロームが「あなたは今日の事を思い出すたび、一生涯 後悔し続けるでしょう」と。

「私はあなたの言葉を信じる事が出来なかったんです。」「そうです。悪魔は人の目には悪魔に見えない。それが人間の弱点であり、悪魔の強みなのです。」…で終わるんですよ。

毎回 一話完結なんですけど、毎回 気色悪い終わり方。むちゃ怖い。

この男の失敗はどこから始まったのか？原因を突き詰めると、敵と味方を間違えたということです。善人を悪人のように思い込んでしまうと、悪人が善人に見えて来るんですね。

真理を嘘のように思い込まされてしまうと、嘘のほうが真理のように見えて来るのです。

味方が敵のように見えて来ると、敵が味方のように見えて来るんですね。

これが、この男が致命的な事をやらかした最大の原因です。敵と味方を見間違えた。

なぜ こんな話を最初にするのか？今の世界の価値観、特に日本の価値観は、聖書の神を有害なもの・無益なもの・無関係なもの・どうでもいいもの。

日本には日本の宗教・日本の神々があって、保守系の識者なんかも、国際情勢を語っている時はフンフンと頷いていけるけど、途中から天皇制の話になって行ったら、天照（あまてらす）がどうのこの、それに付けて、一神教は人間を戦争に駆り立てて、聖書ってダメですよ！みたいな。

皆さん。聖書の神はこれほど善良で、聖書が語っている神は良き方。創造主。あなたの作者。あなたを愛する方。

大体ね、日本の神・韓国の神・アメリカの神って、その発想自体が、人間の文化が作り出した神々であることの証しになっていると思いますよ。

太陽は地球上の人間を照らす天体です。「あれ、日本の太陽」とか「いやいや、アメリカの太陽だ」とか「いやいや、サウジアラビアの太陽やし」とか。太陽という天体は1つです。1つしかない天体に国境や民族は関係ないでしょ。全ての人を恵みで照らしている神は国境・民族 関係ないんです。

今 77 億の人間がいますが、それをずっとさかのぼって行くと、1人の男と1人の女から生まれた。

この1人の男と1人の女をお造りになったのが、聖書が語っている創造主なる神です。

すなわち、日本人の先祖をお造りになったのは聖書の神です。

しかし、あなたにとって味方の中の味方・善にして善・最も正しい 公正なお方を敵のように思い込んでしまうなら、真理が見えなくなるのです。

日本人が持っている この偏見みたいなものを少しでも解く助けになればと思って、その意味も込めて、この『**ざっくり黙示録**』を続けているんですね。

ぜひ今日の講演を通して、創造主なる神はあなたを愛するあなたの魂のお父さん・あなたの造り主だ、ということを感じていただきたいと思います。

今日は**黙示録 11 章後半**ですが、その前に復習を兼ねて、黙示録の流れを考えたいと思います。

人類は歴史上最も恐るべき時代に突っ込んで行こうとしています。これが患難時代。7年間続きます。

7年間の患難時代は 前半と後半に分けることが出来ますが、たった7年間で、恐らく人類の75%が消えます。もちろん分かりませんよ。しかし、最初の3年半で半分消えると書いてあるんです。そして後半は、前半よりもっと酷いことが起こると書いてあります。非常に詳しくリアルに。

今 世界を見渡すと地震・飢饉・変な流行り病（はやりやまい）があつたり。

しかし皆さん、まだ患難時代に入っていません。

患難時代に入る前には、必ず起こらなければならないことがあるんです。それは“携拳（けいきょ）”。クリスチャンたちを天に移動させる。私はまだここで語っています。まだ地上にいてる。教会・クリスチャンたちは、まだ携拳されていません。まだ、患難時代に入っていないんです。

では、患難時代のスタートは何か？

反キリストと言われる独裁者が登場して、イスラエル政府と7年間の契約を結ぶんですね。

これが患難時代の初日です。反キリストとイスラエルの7年契約 調印式の当日が患難時代の初日。

7年間の最後は何か？

キリストがもう1度地上に下りて来ます。これが“地上再臨”で、その当日が患難時代の最後です。

今日の11章は7年間のちょうど中間、後半3年半の 最初の約4日間に起こることです。

内容をざっくり申し上げますと、前半の3年半（1260日）の間、特にエルサレムを舞台として、二人の証人と言われる人たちが現れ、主にユダヤ人に向かって預言します。神の言葉を伝えます。

しかし、この2人は独裁者 反キリストに殺されます。殉教。

不思議なことに、正義の2人のほうが敗北するんです。反キリストのほうが勝ってしまうんですね。二人の証人の死体は3日半 吊るされて見せ物にされますが、彼らは3日半後に復活して、人々の目の前で天に上げられて行きます。

その時、地上で何が起こるか？

大きな地震があつて、エルサレムの1/10が倒れます。その結果、7千人が死にます。

その一部始終を見た、主にイスラエルにいるユダヤ人の心が変わられて行く。

心の変化が始まり出すというところなんですね。

そして11章には この数日間のことだけではなく、第7のラッパが吹き鳴らされたということが書いてあるんです。

今日はこの2つ、両方とも見たいと思います。できるだけ簡潔にまとめたいと思っております。

11:3 わたしがそれを許すので、わたしの二人の証人は、粗布（あらぬの）をまとって千二百六十日間、預言する。

千二百六十日間とは前半の3年半。

二人の証人がどんなメッセージをしたのかは、彼らのコスチュームを見ることで類推できます。

彼らが着ていたのはタキシードじゃない。粗布をまとって。

粗布とはヤギの毛で作った ゴワゴワした 目の粗い 安一い外套です。

旧約聖書では、国家的な危機に瀕したり、徹底的に神の前に悔い改めたりする時に、粗布をまとって神の前に出るんです。これは喜びの日に着るものではない。

結婚式に着るものではなく、神の前に明確な悔い改めと、それに伴う悲しみを表す時に着る衣服です。

二人の証人は2人とも粗布を着ていた。

ということは、彼らのメッセージは悔い改めのメッセージであった、と類推できます。

粗布をまとった2人の預言をひと言で言うと、「敵と味方を間違っているぞ」だと思います。

この1260日間、エルサレムのユダヤ人は鼻高々なんです。民族の悲願である神殿が再建されたから。その神殿で動物のいけにえを献げて、旧約聖書に書いてある通りの礼拝を復活させているんです。そのように計らったのが反キリスト。「最高だぜ！」と反キリストを評価し、有頂天になっている。

「あなた方がこの神殿でやっている礼拝はムダ。本当の神殿は、人として来られたメシア・イエスだ。イエスを除外して、反キリストの保障の下で神殿を造って礼拝しているが、こんなものは無駄だ。」こんなメッセージは自分たちにとって全否定です。

非常に人を不愉快にさせるメッセージで、皆が二人の証人を憎んでいる。出来たら黙らせたい。

昨日、香港の『リング日報』という新聞の創業者が逮捕されたでしょ。リング日報は香港の反体制の新聞で、ずっと一貫して中国の政権を非難している、非常に気骨のある新聞社。

ところが、創業者が逮捕・投獄されている。出て来れる期間になったら、また別の嫌疑をかけて。

「民主活動家たちを台湾に逃がすために取り計らっただろう。国家反逆罪だ！」みたいに。

つまり、聞きたくない不愉快なことを言う者たちを黙らせるために、暴力や警察力を使ったりして、物理的に黙らせようとするわけです。

この時エルサレムで、この人たち2人だけや。あと残りの人は皆 敵みたいな人たち。

2対600万・700万やったら、絶対勝てんやん。ところが、1260日の間 彼らは活動することが出来た。彼らを黙らせることが出来なかった。

11:5-8

5. もしだれかが彼らに害を加えようとするなら、彼らの口から火が出て、敵を焼き尽くす。

もしだれかが彼らに害を加えようとするなら、必ずこのように殺される。

神がかった力が2人であって、皆が出来れば殺したい・消したいと思っているけど、彼らに挑んで行ったら返り討ちに遭ってしまうので、皆こらえてる。

6. この二人は、預言をしている期間、雨が降らないように天を閉じる権威を持っている。

また、水を血に変える権威、さらに、思うままに何度でも、あらゆる災害で地を打つ権威を持っている。

この2人は、自分たちが語るメッセージに耳を傾けさせるために、これでもかこれでもかと地を打つんです。イスラエルだけじゃなく。

出エジプトの時、モーセがエジプトのファラオに向かって、「イスラエルの神を認めて、ユダヤ人たちを奴隷から解放して行かせなさい。」

その時、ファラオは何と言いますか？「主とは誰だ？俺は知らん。俺はそんな神を神として認めん！」

「そうですか。では、あと数日以内に こんなことが起こります。暗闇になります。ナイル川から蛙が出て来ます。ナイル川が真っ赤な血に変わります。」

拒むから打たれるんです。思うままに何度でも地を打つというのは、気紛れに不幸をばらまいているのではない。「悔い改めなさい。」「いやや。」「じゃあ、こうなります。」

「これを見たんだから、悔い改めなさい。」「いやや。」「じゃあ、こういうことがあります。」

思うままに何度でもというのは、思うまま何度でも2人の証言を拒否して来たから、結果として2人も、思うまま何度でも地を打つ羽目になるんですよ。

しかし、2人の活動が終わるときが来るんですね。

7. 二人が証言を終えると、底知れぬ所から上って来る獣（反キリスト）が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺してしまう。

この7節をじっくり考えたいと思います。

二人が証言を終えると、彼らを殺してしまう。逆に言うと、2人が証言を終えるまでは、誰も彼らを殺すことが出来なかった。ここにね、クリスチャンの慰めがあります。

皆さん。私たちキリストを信じている者は、寿命で死ぬと思ってません。

事故で死ぬ・病気で死ぬと思ってないんです。使命が完了した時に、初めて死ぬと思っているんです。使命を果たし終えるまでは、どんなに死にそうでも、どんなに滅びそうでも、また、どんなに敵に囲まれていたとしても死にません。

十分に使命を果たし終えたならば、神は「うん。良くやった。あなたの人生はここまでで良い」と言って、引っ越しさせてくださるんです。

1923年9月1日、関東大震災があったんですよ。あれから、もうすぐ100年ですよ。

私が大好きな尊敬しているクリスチャン 内村鑑三（うちむら かんぞう/1861-1930）は、その時 軽井沢で湯治していました。これは亡くなる7年前の話ですよ。

内村は片足が非常に痛んで、歩く時はいつも足を庇って、引きずりながら移動しなければならなかった。なんとか痛みを軽減したい・足を癒したい。それで、治療のために軽井沢の温泉につかっていたんです。

未明に大地震があって、その時彼は「浅間山が噴火したんちゃうか」と思った。だけど、浅間山から煙出てない。溶岩流れてるワケでもない。いったい何なんだろう？

夜中になって東京の方を見たら、夜中なのに夕焼けみたいになってる。南東の方角を見たら、夕焼けのように赤い。東京中が大火事ですよ。長野まで見えた。長野でそれを見ることが出来たって。

家族は皆東京に残しているんです。それで翌日9月2日、2人の弟子と一緒に10時10分の汽車に乗って、とにかく家族の安否を確かめるために行くのですが、汽車が途中で止まるんですよ。

最終駅まで行くことが出来ないのですが、行ける所まで行って、痛い足を引きずりながら、新宿 柏木の自宅まで行こうとするんです。途中で橋を渡らないと駄目なんです、その橋が震災のダメージで今にも崩れそう。

「先生、遠回りしましょう。」「しかし、ここを遠回りしたらものすごく遅れてしまうぞ。それに、私の足には限界があるんだ。」「でも、もし落ちたら元も子もないじゃないですか。」

「いや、この橋は落ちない。私にはまだ使命があるから。私には、日本に福音を伝えて行くという使命が残っている。だから、神は私を生かすだろう。」崩れかけている橋を渡ったと。

良い子の皆さんは真似をしないようにね。だけど、その気持ち、ちょっと分かる。

クリスチャンは寿命で死ぬんじゃない。天災で死ぬんじゃない。病気で死ぬんじゃない。見かけ上はそういう理由で死んでいるようだとしても、その人が地上で成すべき使命を終えたなら、神は「家に帰っておいで」と仰るのです。

学校で授業や部活動が終わったら どうしますか？学校に泊まりますか？家に帰るでしょ。会社で1日やるべき仕事を全部終わったら どうしますか？会社に寝袋を持ち込んで寝ますか？家に帰るでしょ。クリスチャンはこの地上で仕事があります。神がさせようとしている使命がある。それを全部果たしたら、とっとと家に帰ります。

この2人には、1260日間 エルサレムでユダヤ人たちに預言する、という使命がありました。全世界には14万4千人のユダヤ人たちが宣べ伝えていますよ。この2人は、エルサレムでユダヤ人に語るために1260日間預言していたのです。

彼らを殺したのは誰か？

7. 二人が証言を終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺してしまう。獣はギリシア語でセイリオン。黙示録の中に36回出て来ます。その1回目がここです。この獣は野生の獣/野獣ではなく、反キリストのことです。

なぜそうだと分かるのか？底知れぬ所から上って来る獣と書いてある。

底知れぬ所はギリシア語でアブソス。死後の世界の中で、特に悪霊が閉じ込められている世界です。死後の世界の中で、裁きを受ける悪霊たちが、留置場に閉じ込められているんですね。その世界（アブソス）にいた。アブソスに入るには1度死なないと駄目です。死後の世界やから。アブソス（底知れぬ所）から上って来たということは、反キリストは1度死ぬけど復活した。

復活したというだけでも凄いことなのに、復活した反キリストは、無敵だったはずの二人の証人を殺すんです。今までは、彼らを殺そう・害を与えようとすると、火が出て来て焼き滅ぼした。誰も彼らに手を掛けることが出来なかった。

その無敵だったはずの2人が、復活した反キリストによって殺されてしまった時、皆の心は「反キリストこそ本当の英雄。本当に凄いのは反キリスト。二人の証人以上の存在！」 凄みを感じ、反キリストが提案したり、言ったりやったりすることに、自ら進んで協力するようになって行きます。

反キリストはサタンの最高傑作です。彼は人間だけど、ただの人間ではない。普通の人間ではない。イエス・キリストが聖霊によって受肉した 人となられた神であるように、反キリストはサタンの力によって人となっている人物ですね。サタン(悪魔)の最高傑作です。この人物が2人を殺してしまう。

8. 彼らの死体は大きな都の大通りにさらされる。その都は、霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれ、そこで彼らの主も十字架にかけられたのである。

大きな都とはどこでしょうか？ニューヨーク？違います。ロンドン？違います。

ワシントン？違います。東京？違います。エルサレムです。

そこで彼らの主も十字架にかけられたのである。二人の証人の主はイエス・キリストです。

イエス・キリストが十字架にかけられた都はエルサレムです。

大きな都。エルサレムは大きくないですよ。エルサレムよりも大きな都はたくさんある。

恐らくここで言っている**大きな**は、大いなる・存在感のある・人間の目には非常に価値あるように見える偉大な都。広さじゃない。

この時のエルサレムは、神殿が再建されているエルサレムなんです。旧約聖書時代の神殿が復元されているエルサレムですよ。ユダヤ人に見てみたら、こんなに誇らしい都はない。

惚れ惚れと このエルサレムを見ていたと思います。しかし、それは人間の見方です。

霊的な理解では（別の聖書では **御霊による認識によれば**）**ソドムやエジプトと呼ばれ**。

人間の肉的・人間的な見方では偉大なる神の都・大いなる都に見えるけど、聖霊による認識・霊の目が開かれた人がこの時のエルサレムを見たなら、それは**ソドムやエジプトと呼ばれる**。

実は エルサレムを**ソドムやエジプト**と呼んでいる預言書が1つあります。**エゼキエル書**なんですね。時間の都合で、ちょっとだけ見たいと思います。

エゼキエル 16:1-3 48-50

1. 次のような主のことばが私にあった。これから語られることばの主語は神です。

2. 「人の子よ。エルサレムにその忌み嫌うべきわざを告げ知らせよ。

3. 『神である主はエルサレムについてこう言われる。

ここから **16章**ずっと、神が語りかける相手はエルサレムです。

神はエルサレムを何と言っているか。

48. わたしは生きている—神である主のことば—。あなたの妹ソドムとその娘たちさえ、あなたと、あなたの娘たちがしたほどのことを決してしなかった。

あなたとはエルサレムのこと。「エルサレムには妹がいてる。それはソドムや。だけど、ソドムが行った罪も、エルサレムの罪と比べたらゼロに等しいわ。ソドムの罪も酷かったけど、エルサレムの罪はソドムと比べものにならないほど酷いんだ！」

どんな罪なのか。まずソドムの罪について。

49. だが、あなたの妹ソドムの咎はこのようだった。

彼女とその娘たちは高慢で、飽食で、安逸を貪り、乏しい人や貧しい人に援助をしなかった。

50. 彼女たちは高ぶって、わたしの前で忌み嫌うべきことをしたので、わたしはこれを見たとき、彼女たちを取り除いた。

忌み嫌うべきこと。旧約聖書で忌むべきもの・忌み嫌うべきものは、いつも同じ意味です。偶像礼拝。人間が手で作った神々を拝むこと。偶像礼拝。ソドムは偶像礼拝の町であった。

「そのソドムと比べて比べものにならないほど、酷い偶像礼拝をしているのがエルサレムだ！」

エゼキエル書 23章では（また見といてください）エジプトになぞらえて、エジプトとの関係の中でエルサレムを非難しています。ここでも偶像礼拝です。

つまり患難時代の、特に二人の証人がいなくなった後のエルサレム神殿は、世界中の偶像神殿のセンターとして機能します。世界中の偶像の神殿・宮・仏閣というような神殿の中核センターになる。

どんな中核センターかというと、後半の3年半、世界中の宗教は、ある意味で1人の人物を拝むということにまとめられます。その人物とは反キリスト。

後半3年半の頭に、エルサレム神殿に反キリストの像/偶像が設置されます。

エルサレム神殿は、反キリストを礼拝するための施設に使われるんです。
だから、「今までのどの偶像礼拝の神殿よりも最悪だ！」
悪魔を拝む神殿。それが、エルサレム神殿になるということです。

黙示録 11:8b-10

8b. そこで彼らの主も十字架にかけられたのである。

9. もろもろの民族、部族、言語、国民（くにたみ）に属する人々が、三日半の間、彼らの死体を眺めていて、その死体を墓に葬ることを許さない。

殺された後、2人の死体は墓に埋葬されず、見せしめとして人々に晒しものになります。

その晒された死体を誰が見るのかというと、もろもろの民族、部族、言語、国民。

すなわち全世界の人が見る。こんなこと可能ですか？

例えば、私が梅田の阪急の陸橋の所に吊るされたとしますよ。「うわっ！あんな所に人が吊るされてる！」黒山の人だかりになって、千人・2千人は見るかも分からないけど、地球の裏側の人は見ること出来ませんよね。だけど、見ている人たちがそれをスマホで動画撮影して、フェイスブックやYouTubeにアップしたら、リアルタイムで見ること出来るんじゃないですか。

なぜ全世界の人が同時に、エルサレムの大通りに晒されている2人の死体を見ることが出来ますか？

これが書かれたのは今から1900年前ですよ。その当時、スマホもなければ・衛星中継もなければ・インターネットもない。今でないと理解できないことが書いてあるんです。

つまり、それが可能な技術が出現している時代にこの事件が起こります。

今私たちは、現にその時代に生きているじゃありませんか。いや～、聖書の預言ってスゴイですよ。

10. 地に住む者たちは、彼らのことで喜び祝って、互いに贈り物を交わす。

この二人の預言者たちが、地に住む者たちを苦しめたからである。

ここで面白い表現が出て来ますね。地に住む者たち。人間は地に住むのは当たり前ですよ。

地に住む者たちという言葉が最初に出て来るのは黙示録3章。フィラデルフィア教会への言葉です。

3:10 あなたは忍耐についてのわたしのことばを守ったので、地上に住む者たちを試みるために全世界に來ようとしている試練の時には、わたしもあなたを守る。

地上に住む者たちを試みるために全世界に來ようとしている試練とは患難時代です。

その患難時代には、あなた方はそこにいない。わたしがそこから守る。

つまり、地上に住む者たちの意味は、天に引き上げられずに、そのまま残っている人たちのことです。

地上に住む者たちは比較対照されているんです。誰と？天に住む者たちと。

携挙によって天に住む者たちとなった人に対し、地上に居続けている人たち。

それは、この地上のことが全ての人たち。次の世界のことなど眼中にない人たち。

今見える現実全てを掛けている人たち。

彼らにとって2人の証言の言葉は、一々癪に障る不愉快なメッセージでした。「永遠があるとか、今は患難時代だとか、キリストがまた来るとか、そんな話は作り話だ。聞きたくない！」

嫌なことを言う2人が殺されたので、これが患難時代最初の祝日です。

患難時代に喜び祝って、というのはここしか出て来ません。唯一の喜びの日。

それは、二人の証人が殺されて吊るされていること。全世界的パーティー状態になるんですね。

11:11-13

11. しかし、三日半の後、いのちの息が神から出て二人のうちに入り、彼らは自分たちの足で立った。

見ていた者たちは大きな恐怖に襲われた。

明智光秀の三日天下じゃないけど、「良かったなあ。あの二人の証人は死んでしまった。あいつらは永遠不滅でも何でもなし。敗北者だ！」喜んで万歳バンザイ。皆でパーティーやった。

そしたらなんと、この2人が復活するんです。見せしめだから、皆が見える所に死体があったんですね。復活して、自分たちの足で立った。見ていた者たちは大きな恐怖に襲われた。

12a. 二人は、天から大きな声が「ここに上（のぼ）れ」と言うのを聞いた。

「ここに上れ」と言う声は、恐らくイエス・キリストです。

というのは、8節 彼らの主も十字架にかけられたのである。2人の主はイエス・キリストなんです。

「ここに上れ。あなた方は使命を全部やり終えた。さあ、ここに上りなさい」と言うのを聞いた。

12b. そして、彼らは雲に包まれて天に上った。彼らの敵たちはそれを見た。

教会の携拳の時、それを見れる人は誰もいません。一瞬で完了しますから。

でもこの時は、雲に包まれて天に上った。そのプロセスを地上にいる人たちは見ます。

と同時に、スマホ経由で全世界の人たちもそれを見るでしょう。なので、彼らの敵たちはそれを見た。

見た時のその恐れ。それは、何とも言えないものがあると思います。

13. そのとき、大きな地震が起こって、都の十分の一が倒れた。この地震のために七千人が死んだ。

残った者たちは恐れを抱き、天の神に栄光を帰した。

二人の証人が復活して天に上げられて行く。

地上では地震が起こって、エルサレムの1/10が倒れ、7千人が死ぬ。

その一部始終を見た時、彼らはどう思ったでしょう。少なくとも3つくらいのことを、彼らは考えたんじゃないかな。

① 二人の証人が語った言葉は本物だ。彼らは言うだけの人物じゃなかった。

1260日の間 反発していたけど、彼らは未だかつてなかった事—死んで3日半後に生き返るのは蘇生じゃない。ちょっと呼吸止まった・心臓止まった。電気ショックで息吹き返した。そんなんじゃない。3日半の間だから、ウジが湧いてると思います。腐ってる。それなのに、自分の両足ですっくと立ち上がって、天に上って行った。それを見た時、「二人の証人の言葉は本物である。」

② 無敵だった二人の証人を反キリストが倒した時、反キリストこそ最強だと思った。

しかし、2人が復活したということは、反キリストの攻撃を無にしてしまう偉大な方が他におられる。死の力を上回る復活の力がある。反キリストが出来るのは、この人たちを殺すところまで。

死んで3日半後によみがえることによって、反キリストを超える力を持つ方がおられ、その方が二人の証人を立たせた。反キリストが最強じゃない。それを超える存在がおられる。

③ この事件の最短3年半前、だから3年半以上前（5年前なのか10年前なのかははっきり分らないけど）、患難時代に突入する前に 教会は携拳されていますね。

何億ものクリスチャンが忽然と姿を消した。その時、皆夜逃げしたとか、集団自殺したとか色々、携拳という事実に恐れを抱かせないようにするための、不信仰な説明がまかり通っていると思います。しかし、2人がゆっくりと天に上げられて行くのを目の当たりにした時「携拳はあったんだ。」新約聖書に書いてある奥義である携拳。「本当だったんだ。」

この恐れは単に怖い・恐怖というのではなく、残った者たちは恐れを抱き、天の神に栄光を帰した。すなわち、天の神に栄光を帰する心が生まれるような恐れ。敬虔な恐れなんです。オバケが怖いとかウルトラQが怖いとか、そんなんじゃない。彼らはここで、神ご自身の権威に触れて 厳かな気持ちになって、「このようなことを成さしめた神よ、栄光を受けてください」と願うんですね。

しかし、恐れを抱き、天の“メシア・イエス”に栄光を帰したとは書いてない。天の神と書いている。地では、後半3年半の初日から反キリストが地上の神です。彼は自分のことを神と名乗り、自分を礼拝するように全世界に強要する。地の神に対して天の神。地の神ではない天の神。だけど、イエス・キリストではないんですね。イエスを理解するところには まだ至っていない。

ユダヤ人の最終的な霊的回復が芽生え出したターニング・ポイント、これが この瞬間です。天の神に栄光を帰した時から、二人の証人や 14万4千人の人たちが宣べ伝えていたことを実行する人たちが、イスラエルの中に現れます。彼らは神殿が建っているエルサレムにしがみつかないで、エルサレムを後にして山へ逃げるんです。

「荒らす忌むべきものが聖なる所（神殿の聖所/至聖所）に立つのを見たならば、そこに反キリストの偶像が建てられるのを見たならば、そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。」このイエスの言葉に従うんですね。なぜ従うのか？恐らく、二人の証人が前もって このことを語っていたからではないかな、と私自身は考えています。

この様子は、全世界に出て行って、福音を宣べ伝えている 14万4千人たちも語ると思います。「これから いよいよ本格的な大迫害が来るけれど、みんな、ひるむんじゃないぞ！3年半後にキリストが地上再臨するから！」と励ますんじゃないかと思います。

さて、ここまでが挿入です。実は、ヨハネの黙示録は7年間の患難時代について、基本的には時系列で書いてあります。患難時代 前半3年半の前半は7つの封印。前半3年半の後半は7つのラッパ。そして、後半の3年半は7つの鉢。7つの鉢は、7番目のラッパが吹き鳴らされると、3年半かけて7段階で裁きが下ります。今から読むのは、この7番目のラッパを吹くところです。

11:14-18

14. 第二のわざわいが過ぎ去った。見よ、第三のわざわい（後半3年半のこと）がすぐに来る。

15. 第七の御使いがラッパを吹いた。すると大きな声が天に起こって、こう言った。

「この世の王国は、私たちの主と、そのキリストのものとなった。主は世々限りなく支配される。」不思議な言葉ですね。

この世の王国は、いよいよ後半3年半を皮切りに反キリストのものとなります。

ところが、同時に言われました。「この世の王国は、私たちの主と、そのキリストのものとなった。」
「見かけ上は反キリストの国がスタートするように見えて、実はここまで来たらゴールは近いよ。」
ここから3年半後には必ず実現することなので、預言的にここで宣言しているんです。

16. すると、神の御前で自分たちの座に着いていた二十四人の長老たちが、ひれ伏し、神を礼拝して言った。

神は天におられます。24人の長老たちは神の御前にいるんですね。

だから、この24人の長老たちは天にいる人たちで、これは携挙された教会のことです。

それは既に黙示録4章と5章で説明していますので、なぜなのかと思う方はバックナンバーでご覧頂ければと思います。

大河ドラマ いきなりドラマが始まるのではなく、主題歌・テーマ音楽が流れますね。そしてドラマが始まる。それと同じように、後半3年半の大患難の前に、24人の長老たちの礼拝の歌がシンフォニーのように立ち上るんです。その内容が17節から。

17. 「私たちはあなたに感謝します。今おられ、昔おられた全能者、神である主よ。あなたは偉大な力を働かせて、王となりました。

18a. 諸国の民は怒りました。しかし、あなたの御怒りが来ました。

大患難時代は別の表現で“神の御怒りの日”。患難時代の別名は“神の御怒りの日”です。

18b. 死者がさばかれる時、あなたのしもべである預言者たちと聖徒たち、御名を恐れる者たち、小さい者にも大きい者にも報いが与えられる時、地を滅ぼす者たちが滅ぼされる時です。」

なぜ患難時代があるのか、3つの理由が出て来ます。

①死者がさばかれる時だから。②あなたのしもべである預言者たちと聖徒たち、御名を恐れる者たち、小さい者にも大きい者にも報いが与えられる時が来るため。③地を滅ぼす者たちが滅ぼされる時が来るため。

これを時系列で言うと、③地を滅ぼす者たちが滅ぼされる時が来るため。②あなたのしもべである預言者たちと聖徒たち、御名を恐れる者たち、小さい者にも大きい者にも報いが与えられる時が来るため。①死者がさばかれる時だから。③②①の順です。これを時系列で見て、終えたいと思います。

なぜ患難時代があるのか？何のために患難時代が来るのか？

1. 地を滅ぼす者たちが滅ぼされるため。

地/地球を滅ぼそうとする者たちとは、一にはサタン。

特に患難時代では、サタンの最高傑作である反キリスト。

そして、反キリストを補佐する偽預言者と呼ばれる人物がやがて出て来ます。

このサタン・反キリスト・偽預言者は悪の三位一体です。

父・子・聖霊の三位一体ではなく、その対照形となるような悪の三位一体。

悪が地上に残っている限り、人は良く生きたいと思っても、誘惑があるので真っ直ぐに生きにくい。この悪の三位一体に自ら進んでぶら下がって行くような人たち、悪の大きなシステムを、地上から一掃するために患難時代があります。

サタンやその影響下にある者をこの世界から完全に拭い去り、追放するための期間が患難時代です。

2. 神のしもべである預言者たちと聖徒たちが報いを得るため。

聖徒たちの中には、御名を恐れる者たち、小さい者も大きい者も、有名な人も無名の人も、大人や子供や色んな人たちがいるけど、ここの聖徒たちは、基本的には旧約時代の人たちです。携挙されるのは新約時代の教会だけです。

では、旧約時代の信仰者たちは、いつ栄光の体に変えていただけるのでしょうか？

患難時代が全部終わったら。患難時代が全部終了した後で、千年王国が始まる前に、旧約時代の聖徒たちは皆よみがえり、栄光の体が与えられ、千年王国で王として仕えるんですね。

だから、アブラハムも・イサクも・ヤコブも・ヨセフも・ダビデも・エリヤも、旧約聖書に登場して来た色んな人たちは、患難時代が終わった後で復活します。これを“第一の復活”と言います。

それは、患難時代が来ないと来ないんです。患難時代が来た後で来ます。

なぜ患難時代がありますか？それを終わらせたなら、旧約時代の聖徒たちに報いを与えることが出来るからです。

3. 死者がさばかれるため。

これは、全ての死者は千年王国の後に、最後の審判に立つという意味です。

人は死んでゼロじゃないんですね。人は死後にこそ審判を受けると聖書は語っています。

多くの人は、自分の視野の限界を世界の果てだと勘違いするんですね。「自分の視野で見える世界だけがこの世界の全てだ」と思いやすいのですが、人間が見えている範囲なんて元々限界があるんです。視野の向こう側があるにもかかわらず、向こう側にあるために見えないので、次があるということが分からない。

しかし、人間の魂を永遠の存在に造られた神は、「死後も人間の霊・魂は存在し続けるんだ」と言っておられます。この死後の裁き・死後に死者が受ける裁きが“最後の審判”とか“白い御座の裁き”と言われて、黙示録 20 章に出て来ます。

地を滅ぼす者たちが滅ぼされるのは 19 章。聖徒たちの復活は 20 章前半。死者の裁きは 20 章後半。これが黙示録に描かれていることなんですね。

死者の裁きを考えた時、神は私たちに絶対そこに行って欲しくないの、この死者の裁きから免れるための方法をちゃんと準備してくださっているんですね。それがイエス・キリストです。

この方は私たちの罪の贖い主として、この世界に来てくださった方です。

二人の証人は“証しを終えると死んだ”と書いてありました。

イエス・キリストは“十字架に掛かって「テレスタイ！（完了した！）」と仰った後で、霊を神に返した”と書いてあるんです。

二人の証人の使命は 1260 日間 預言することでした。

イエス・キリストの使命は、私たちの罪を完全に赦すために、ご自分の命を償いの代価として献げることでした。そのために来られたのです。私たちの救いを完成させるために来てくださった。

完成したので、完了したので、息を引き取られました。

私はなぜイエス・キリストを信じたのか、を考えていました。

私がキリストを信じたきっかけは、聖書預言に触れたことです。聖書預言を通して、聖書がただの本ではなく、人間が考え出した書物ではなく、真に神の言葉だということが分かったんです。

ユダヤ人の歴史を調べて行ったら、聖書の預言の通りに世界が動いて来た。

ユダヤ人が進んで行ったことを見て行ったら、こんなことは神でないと書けない。

その聖書が“携拳”を書いているのを見た時、恐ろしくなったんですね。

生きたまま患難時代に入りたくないという一心です。だから、恐怖で信じたと言ってもいいかもしれませんが。でも、恐怖で信じた場合、キリストとの間に何かごちないものが残るんですね。

患難時代に行かないために どうしたらいいのか？

I テサロニケ 10:1 御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを、知らせているのです。

この御子こそ、神が死者の中からよみがえらせた（復活させた）方、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスです。

御子が天から来られるとは、携拳のために空中再臨してくださるということ。

イエスは何のために また天から来てくださるんですか？

先程、患難時代の別名は“神の御怒りの日”と言いましたね。ここに何と書いてありますか？

やがて来る御怒り（患難時代）から私たちを救い出してくださる。そのために来てくださるんです。

今 イエスを信じている人たちは患難時代に遭いません。なぜなら、やがて来る御怒りから救われる、と書いてあるからです。

I テサロニケ 5:9 神は、私たちが御怒りを受けるようにではなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださったからです。

神は、私たち（クリスチャンたち）が御怒りを受けるようにではなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださった。

御怒りとは何でしたか？患難時代です。患難時代を受けるようにではなく、救いを得るように。

ここでの救いは体の贖いのことです。体の贖いは携拳される瞬間に起こることなんです。

だから、クリスチャンは患難時代と全く無縁です。

患難時代の時、24人の長老として、天で神に礼拝を献げる者だと描かれているんですね。

さて先程の話です。怒りから逃れるために、というのが私の原点なのですが、信じた後で、改めて「ありがたいなあ」と思えるのに少し時間が掛かりました。

どういう時に「イエスが私の救い主となってくださって感謝します」と言えたか。

先程 内村鑑三の話をしましたね。痛んだ足を引きずりながら、大混乱の中、軽井沢から東京に向かいますが、何のためにそんな無理をしたのか？

震災で、もし家族が生き埋めになっていたら…、逃げ切れなかったら…、埋もれたままになっていたら…。家族が苦しんでいる様子を想像すると、居ても立っても居られなくなって、行動を起こさずにおれなくなったんです。愛する者が苦しんで もがいているかもしれないと思った時、心の中のそのイメージに駆り立てられるようにして、「私が行って助けてやらねば！」という気持ちになり、行動せずにはいられなかったんですね。

私がキリストを信じたのは少し似てます。立場が逆になるんですが。
キリストはあの十字架の上で、神の怒りに生き埋めになるような闇の中に置かれ、裁きから逃げることも出来ず、永遠を凝縮した3時間の中 苦しみ苦しんでおられる。その苦しみは私のためだった…。キリストは私のために ここまで苦しんでおられる。
あの十字架の上で、ここまで苦しんでくださった、ということを使った時、決断せずにはおれませんでした。この方を「わが主」と告白せずにはおれませんでした。
なぜなら、私のためにここまで苦しんでくださったからです。

そして、この方は苦しんで終わりではなく、3日目に復活し、よみがえり、天に戻り、まもなく迎えに来てくださる方なのです。

いかがでしょう。患難時代にいる者としてではなく、患難時代の前に天に移される者として、『**ざっくり黙示録**』を聞ける立場に入っていたいただきたいな、と心から願っております。
あなたのための救い主イエス・キリストです。ぜひ、このイエス・キリストを信じてください。
心からお勧めして、今日のメッセージを終えたいと思います。

- ~~~~~
- * 動画はYouTubeで「**HCA 東住吉キリスト集会**」
 - * ラジオ番組「**聖書と福音**」(約15分)もぜひどうぞ。YouTubeもあります。
 - * YouTube「**ごうちゃんねる**」もぜひ見てください。

動画筆記 : Rumi